

ミズベリング

～河川空間を「ワクワク」させる官民連携プロジェクト～



やもと たか とし
矢本 貴俊*

「水辺を楽しむ」ことにおいては、誰であろうと平等に共感することができ、市民・企業・行政などの肩書きの違いは関係ない。立場の境界を超えた連携により、水辺とまちが一体となった美しい景観や新しい賑わいを生み出すプロジェクトである「ミズベリング」の取り組みについて紹介する。

1. はじめに

「ミズベリング」という言葉を読者の皆さんは聞いたことがあるだろうか。著者が初めてこの言葉を聞いたのは2016年。当時著者が大学院生で、国土交通省への就職活動の一環として実施されたグループディスカッションであった。初めて聞いたネーミングであったが、「水辺で何かをするのだろう」ということは感覚的に理解できたという記憶はなぜか鮮明に覚えている。

「ミズベリング」はそのネーミングの良さも相まって、日本の中でも代表的なデザイン賞である「グッドデザイン賞 金賞（経済産業大臣賞）」を受賞している。金賞はグッドデザイン賞の中でも、応募総数5,000弱のうち、わずか20事例しか選ばれない狭き門である。

それだけ洗練されたネーミングであるがために、初めて聞いても内容が分かり、かつ、その記憶が強烈に頭の中に残っていることにも合点がいく。

前置きが長くなったが、この「ミズベリング」の魅力とは何か。この場を借りて紐解いていきたい。

2. ミズベリングとは

ミズベリングとは、「水辺+RING（輪）」「水辺+R（リノベーション）+ING（進行形）」の造語であり、水辺に興味を持つ市民や企業、そして行政が三位一体となって、水辺とまちが一体となった美

しい景観と、新しい賑わいを生み出すムーブメントを、つぎつぎと起こしていくプロジェクトである。

水辺の利用者を増やし、水辺を徹底的に活用する運動

- 一度は水辺に背を向けた街並みが、近年、都市の再開発等により、川や水辺を活かしたまちのシンボルとなる空間を形成する動きがある
- 平成25年に設置された「水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会」において
 - ① まちにある川や水辺空間の賢い利用
 - ② 民間企業等の民間活力の積極的な参画
 - ③ 市民や企業を巻き込んだソーシャルデザイン3つのコンセプトが提示され、この具現化に向けて「ミズベリング」がスタート
- これまで川に関心のなかった人々や事業者が、自由発想で語り合い、主体的に新たな水辺活用にチャレンジする官民一体のムーブメント

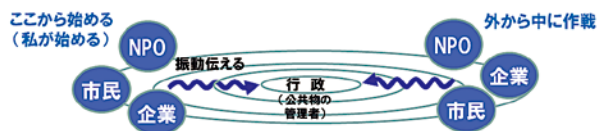


図-1 ミズベリングの概要

我が国においては、かつて川は美しい景観を創造し、また、人々は川で洗濯をし、舟運によって必要物資を輸送するなど、川は人々にとって身近な存在であった。しかし、高度経済成長期を経て、まちは川から背を向け、いつの間にか疎遠な関係となってしまった。

このような状況を打開するために2013年に始まった「水辺とまちのソーシャルデザイン懇談会」を皮切りにミズベリングのプロジェクトは始動し、本年度で8年目を迎え、ミズベリングのFacebookフォロワーは6,000人を超えた。

ミズベリングの最大の魅力は、「誰でも参加でき、誰もが主役になれる」ところであると著者は考える。具体的な活動内容を紹介していきたい。

*国土交通省 水管理・国土保全局 河川環境課 河川環境教育係長

1) ミズベリング定例会議

ミズベリングの全体的な舵取りを行う「ミズベリング事務局」では、毎週火曜日15時から17時までミーティングを行う。開始後まず行うことは、参加メンバーそれぞれが、1週間の間で得た水辺に関するトピックや身近にあったニュース（仕事、プライベート関係なく）などを順番に発表していく「トピックシェア」である。トピックシェアが終了した段階で会議時間の半分以上が経過していることも多々あるが、最新の水辺情報が共有されるとともに参加者の脳内は自然とほぐれ、良いアイデアが浮かび、結果的に定刻には議論がまとまり会議は終了する。

ミズベリング定例会には水辺に興味がある人、水辺で活動を行っている人、誰でも参加ができる。定例会の参加者同士が化学反応を起こし、水辺の面白い取り組みが生まれることも特徴の一つと言える。

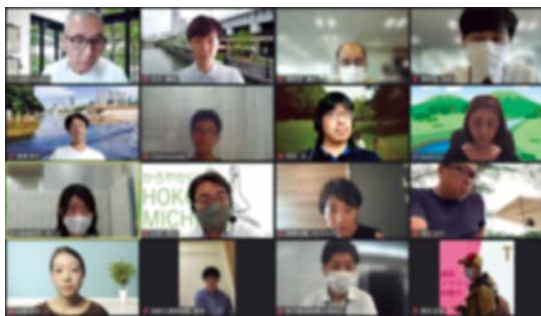


写真-1 ミズベリング定例会議の様子

2) ウェブサイト・SNS・パンフレット

ミズベリングの公式ウェブサイトやFacebookページでは、全国各地の水辺の取り組みがタイムリーに更新される。ミズベリングでは、起こった出来事（結果）よりも、その背景にある人の思いや動機など、プロセス面を大切にしている。また、水辺の活動事例やノウハウなどを綴ったパンフレットも作成しており、公式ウェブサイトから閲覧できる。



図-2 ミズベリング公式ウェブサイト
(<https://mizbering.jp/>)



3) ミズベリング・フォーラム

毎年テーマが設定され、市民・企業・行政など様々な水辺の活動家が登壇し、自らが行ってきた水辺の成功体験を語り、全国の水辺の関心層にインスパイアを与えるイベントが「ミズベリング・フォーラム」である。ここでも重要なのは「結果」ではなく、「プロセス」であり、「人」である。

イベントで生まれるつながりはその後の各地の活動に大いに影響を与え、ポジティブな連携の輪が生まれるきっかけとなる。



写真-2 ミズベリング・フォーラム

4) ミズベリング〇〇会議

我が国には大小さまざまな河川があり、それぞれに個性がある。河川（あるいは地域）の個性を生かした水辺の活用について語り合うことを「ミズベリング〇〇会議（〇〇にはご当地名やテーマ名などが入る）」と呼ぶ。

ミズベリング〇〇会議では、市民・企業・行政などの多様な参加者が、互いのアイデアを披露し、肩書きを超えた自由な議論を行う。ここでも化学反応が起こり、アイデアがアイデアを呼び、そのアイデアに共感した仲間が集まる。

ミズベリング〇〇会議は全国で展開され、これまでに70以上の箇所で開催された。



写真-3 ミズベリング〇〇会議

5) 水辺で乾杯

水辺に行かずして水辺を語れず。会議室で考えるだけでなく、実際に水辺に行き、その良さを感じ、多くの人と共感することも重要である。そのような思想で生まれた取り組みが「水辺で乾杯」である。

水辺の関心層（ミズベリスト）が全国各地の水辺に集まり、毎年7月7日7時7分に全国一斉に乾杯を行う。ミズベリングウェブサイトには各地の実施状況の写真が投稿され、全国にはこれだけ多くの水辺の関心層がいることが確認できる。

2021年においては、新型コロナウイルスの感染状況も踏まえ、「今年は、SOLOKAN!ひとりで乾杯!!」をテーマとし、北海道から沖縄まで（さらに遠方のニューヨークまでも!!）合計131箇所ですolo乾杯が実施された。皆が水辺に一堂に会せずとも、水辺の良さは一度に共感された。



図-3 「水辺で乾杯2021」実施箇所

3. ミズベリングによる地域活性化の事例

ミズベリング〇〇会議などで生まれたアイデアは、「まずはやってみる」から始まり、やがて「地域の名物」とまで言われるような大規模プロジェクトに発展する。その好事例をいくつか紹介する。

1) 事例① ～ミズベリング信濃川やすらぎ堤～

新潟市の中心街のそばを流れる信濃川の堤防が「かわまちづくり^{*}」によって緩傾斜化されたことを契機に、世界的なアウトドアメーカーである「スノーピーク」が区域全体のマネジメントを行い、「アウトドアと健康」をテーマに、オープンカフェやBBQなどの飲食店等が出店された。「水辺アウトドアラウンジ」として、自然と人、人と人をつなぐ水辺の非日常空間でのひとときを提供することで、新潟の夏の風物詩となっている。



写真-4 ミズベリング信濃川やすらぎ堤（新潟市）

2) 事例② ～東京ミズマチ～

東京都墨田区を流れる北十間川では、「伝統と先進が会う水辺と街の賑わい交流軸の創出」をコンセプトとして、官民連携による水辺・鉄道高架下・道路・公園が隣接する立地を活かした一体的な空間づくりが実現した。東武鉄道高架下商業施設「東京ミズマチ」や、浅草から東京スカイツリーまでの観光拠点間を結ぶ鉄道歩道橋「すみだりパーウォーク」によって、水辺に新たな賑わいが創出された。



写真-5 東京ミズマチ（墨田区）

4. おわりに

我が国には、賑わいの可能性を秘めている河川が多く存在する。特に、コロナ情勢を踏まえた人々の空間の楽しみ方にも少なからず変化が生じている中で、地域の特性を生かし、新たな価値を生み出していくことは非常に重要である。

地域活性化や観光振興において、河川は重要な役割を担っており、ミズベリングの取り組みがさらに社会に浸透し、これらの発展に寄与することが期待されている。

【用語解説】

※かわまちづくり：河口から水源地まで様々な姿を見せる河川とそれに繋がるまちを活性化するため、地域の景観、歴史、文化及び観光基盤などの「資源」や地域の創意に富んだ「知恵」を活かし、市町村、民間事業者及び地元住民と河川管理者の連携の下、河川空間とまち空間が融合した良好な空間形成を目指すの取組み。国土交通省が平成21年度より進めており、令和3年8月末時点で244地区を登録。

【著者紹介】 矢本 貴俊（やもと たかとし）

1991年生まれ。2015年中央大学理工学部都市環境学科卒業。2017年同大学院理工学研究科都市環境学専攻修了。国土交通省国土技術政策総合研究所下水道研究部下水処理研究室、水管理・国土保全局河川環境課河川保全企画室を経て現職。